# ぼくの気持ち

古川北小学校
三年
森川
絢斗

ぼくは、2年生の10月に左足首、12月に右足首をサッカーの練習中にこっせつしました。そのときの体けんからかんじた、ぼくの気持ちをつたえようとおもいます。

はおとうさん、おかあさん、おじいちゃんにおくりむかえをしてもらいながら登校しました。足首をこっせつしているあいだ、小学校へ行きました。小学校の中では、まつばづえを使って歩くときは、車いすを使っていました。学校でだいすきなサッカーや体育のじゅ業ができなくてとてもたいくつでした。それに自分でおもうように動けなかったり車いすは大きくてスペースがひつようで大へんでした。ぼくは、みんなのじゃまになっているのではないかとおもっていました。

そんなぼくをみて、友だちは「だいじょう

ぶ？」「なにかてつだう？」と声をかけてくれました。きゅう食時間、ぼくのぶんの食じをせきまでは、こんでくれたり、朝や帰りの時間ランドセルをロッカーにはこんだり、持ってきてくれたりしました。ぼくは、とてもうれしかったことをおぼえています。いつもは、はずかしくてなかなかいえないけれど、ありがとうを友だちにつたえました。友だちも、それをくさそうにわらっていました。ぼくはありがとうをつたえたら心の中がほっとしてあたたかくなりました。もしかしたら友だちも「なにかてつだう？」と声をかけてくれるのかもしれないと今はおもいます。

ぼくもこまっていたり、てつだいがひつような友だちがいたら「なにかできることはないですか？」と声をかけてあげられるようになりたいです。そうしたら、ぼくのまわりにはありがとうがあふれてたすけあう人たちがたくさんふえてくるとおもいます。これがぼくのけ

がをして、はじめて気づいた気持ちです。この気持ちをわすれないで、こまっている人がいたらたすけてあげたいです。